

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	総括：テーマ：「近代化」の意味を考えるーアジアとヨーロッパの錯綜
Author(s)	シンポジウム準備委員会,
Citation	史学研究 , 303 : 59 - 70
Issue Date	2019-07-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055657
Right	
Relation	



テーマ：「近代化」の意味を考える

— アジアとヨーロッパの錯綜 —

総括

シンポジウム準備委員会

一 シンポジウムの概要

今年度の大会シンポジウムは、本年が明治維新一五〇周年にあたるということもあり、さまざまな国の「近代化」について考えてみることにした。すなわち、近代化のプロセスをどう見るのか。報告者三名の方、そしてフロアの皆様と議論する中で、理解を深めて行けたらと考えている。

さて、近代化の問題を検討する上で考えたいのは、「自己認識」と「他者認識」が「錯綜」するところに、個々の国の特徴を見るという方法論である。すなわち、「自己認識」に基づき将来のあるべき姿が模索され、いかに他者を認識するかがその国家、民族の行く末に大きな意味を持つという考え方である。

「自己認識」に基づき、将来のあるべき姿が模索される。また、他者との関係を持たざるを得なくなった段階で、いかに他者を認識するかがその国や民族の行く末に大きな影響がある。また、時に他者に対する誤った認識が政策の誤りを生み、国益を損なうことがある反面、誤認ゆえに新たな政策が

作り出されて、それが対内的にも対外的にも大きな影響を持つこともある。そこで今回は、「自己認識」「他者認識」「錯綜」というキーワードに基づいて三人の方々を中心に皆で議論してゆきたい。

第一報告は、田口由香氏（長崎大学）が「ヨーロッパのアジア進出と明治維新—イギリスとの関係を中心として—」と題しておこなった。自由貿易帝国主義をとるイギリスが、世界の中で日本をどのように位置づけ、幕末期の日本の朝廷・幕府・諸藩をどのように認識していたのか、これがイギリスの「他者認識」となる。また日本側、主に長州藩、薩摩藩が当時の国際情勢をどのように認識し、イギリスを中心とする欧米諸国との貿易関係をどのように認識して対応したのか。これが「自己認識」と「他者認識」にあたると思われる。こうした点をふまえて幕末期を中心に検討した。

また第二報告は、宮古文尋氏（上智大学・埼玉大学非常勤講師）が「清末親政期の政治制度改革構想における海外政治への眼差し」と題しておこなった。すなわち、本報告の検討課題として、一つ目に、改革が中央政府の権限強化へと向かう契機と理由はいかなるものであり、清末新政の主導役であった督撫は、その過程において、いかに立ち振る舞ったのか。つまり、改革当初の思惑とは異なる方向へ向かおうとしたならば、督撫はそれにどう対応したのか。二つ目に、督撫の考えた改革構想、そしてそれを仮に立憲だとするならば、その構想は具体的にいかなるものであり、それは清末新政に

おいて推し進められた政治制度改革、あるいはその構想にどう反映されていたのか、つまり清末新政における政治制度改革、あるいは立憲は、どの程度督撫の構想が反映されたものだったのか。そして三つ目に、改革構想者がその構想のモデル、模範としたであろう海外政治に対する理解はいかなるものであり、それは彼らの構想にどのように反映されたのか。そうした理解により、改革の構想はどのように変遷していったのか、この三点について検討した。

そして最後の第三報告は、大井知範氏が「一九世紀ドイツの東アジア像と帝国主義進出―絵入り新聞に映し出された世界認識―」と題する報告をおこなった。

すなわち、ジャポニスムというフランスやイギリスの日本に対する見方については頻繁に語られるが、ドイツにおけるジャポニスムはいったいどういうものだったのか。ドイツ語圏最大の部数を誇っていた挿絵入り新聞、つまり『ライプツィヒ絵入り新聞』はこれまで史料として使われることがあまりなく、そこに描かれた東アジア像がどのようなものであったのかというのは未解明の状況にあり、本報告ではそれを取り上げた。さらには、こうした表象・イメージとか言説、そうしたものをドイツの東アジア政策の枠組みの中で論じてみて、そこに海軍や植民地進出の問題が絡んでくるが、そういうイメージの形成だけでなく、それが実際の行動とどのように絡み合っていたのかを問う必要性があると思われるので、そういったところにも関心を当てる。そうすることで、「他

者認識」の中に実は「自己認識」が投影されていた事実が読み取れるかもしれない、そういった仮説を立てて、ここでは特にその帝国主義や植民地主義の文脈が重要な意味を持つものと思われる。そこでこのような課題認識のもと、報告では東アジアに対するドイツのまなざしと行動の中から、一九世紀後半に見られたドイツの世界認識の一端を探った。

二 コメンテーターによるコメント

コメンテーターは曾田三郎氏（広島大学名誉教授、中国近代史）にお願いした。

曾田氏は、コメントは各報告に対する質問や疑問という点ではなく、自身のこれまでの研究を参考に、一九世紀後半から二〇世紀初めまでの時期を三つに分け、「他者認識」がどのように変遷したのかを紹介して、あとの討論の材料にして欲しいと述べられた。

第一の時期は一八五〇年代から六〇年代、日本でいえば幕末維新期、中国でいえば洋務運動が始まった時期、西洋ではプロイセンのドイツ統一が進む時期である。特に注目したいのは、中国や日本に西洋事情を伝えた漢語の書物である。具体的には魏源の『海国図志』、徐繼畲の『瀛環志略』、そして王韜の『普法戦紀』の三冊である。

『海国図志』は、イギリス人が著した世界地理の書物を中国の地理書や宣教師の著作で補ってできた世界の地理書である。この本で強調しておきたい点は、幕末の日本に対して最

も大きな影響を与えた漢語の書物だということである。最初に刊行されたのが一八四四年、日本に初めて入ってきたのが一八五一年であり、輸入されるたびに価格が上昇するなど需要が高かった。そのため、重要なところは日本でも翻刻された。

この本の内容で有名なのは、欧米諸国に対抗するために「夷の長技」を取り入れていくことを示した点にある。その時代において、「長技」とは、日本・中国ともに軍事技術と考えられた。当時はそう考えられたが、「夷の長技」は本主に軍事技術だけなのか、両国ともにその認識が後の歴史において確かめられていくことになる。

また二番目の『瀛環志略』、これも西洋人の地理書をもとに作られたものであり、初版は一八四八年、一八六六年に再刊されている。この本については、佐賀藩の大隈重信が世界情勢を認識するうえで愛読したといわれている。このように幕末の日本においてオランダ情報に加え、漢語の書物からも欧米諸国に関する情報を手手していたのである。しかしながらやがて一八七〇年代初めには、そのような意味での漢語の著作に対する日本での需要は失われていく。

その画期となるのが、三冊目の王韜が書いた『普法戦紀』である。これはプロイセンとフランスの戦争について、なぜプロイセンが有利に進められたのかを述べた本である。最初は香港の新聞で連載され、やがて上海の新聞に転載され、さらに七四年に著書として出版されている。

次に第二の一八七〇年代から八〇年代は、日本では立憲制の導入が始まる一方、中国では洋務運動が拡大し、西洋ではドイツ帝国が誕生して憲法が制定される時期である。日本において漢語の書物への需要が失われたのは、いうまでもなく世界情勢を認識する手段が拡大したからである。たとえば、欧米諸国への留學生の派遣をみると、七〇年代初めには四〇〇名を超えている。そのこともあって、西洋の諸言語で書かれた書物を読むことも可能となった。さらには世界に向けて視察団が派遣されていく。有名なのが七一年の岩倉使節団である。

中国との比較において、この視察団には特徴として二つの点がある。第一に政府の中心人物の約半数で編成されていること。第二に視察内容として、この時点で西洋の憲法が注目されていることであり、具体的に精力的に動いたのは木戸孝允で、国家による統治の基礎となる憲法に視察の焦点をあてたという点で重要な意味をもっている。木戸は帰国した後、一八七三年に憲法制定に関する意見書を出している。ドイツ憲法を参考に諸制度を整備しようというものである。ただし、このような考え方が実際の明治憲法の制定につながったのかというところでもない。この後、一八八二年から翌年にかけて伊藤博文の憲法調査が始まったが、これに関する研究によれば、伊藤がひかれたのはドイツでの憲法講義ではなく、オーストリアでのそれであった。その理由の一つは、議会制度も尊重すべきだと考えた点である。そのような考えを持って

帰ってきた伊藤の憲法案作成により、議会や政党を見据えた明治の政治体制が出来上がっていくことになる。

それでは、同じ時期の中国の西洋認識はどうであったろうか。中国では一八七〇年代から、ドイツを含めて、外国に公使が派遣される。派遣された公使は、西洋で何を見てどのよう報告したのだろうか。この点に関して、イギリスに派遣された郭嵩燾が典型的な人物である。彼は、西洋諸国は単に軍事や技術だけが優れているのではなく、立派な教育制度などを整えた文明国であると報告しているが、これが国内で大問題となる。任期を終えて帰国した郭嵩燾は身の危険さえ感じるといふことで北京には寄らず、湖南が郷里だったと思うが、直接そこに帰らなければならない状況に置かれてしまった。

同じ時代、このような外国公使の派遣だけではなく、視察活動もおこなわれている。一八八〇年代後半、外国に向けて視察員が派遣されている。ただし、岩倉使節団と比較すると大きな違いがあり、ほとんどが中下級の役人、しかも単独の視察である。作成された報告書もほとんど政策につながることはなかった。そのように外国に公使を派遣する、視察をおこなうということになると、当然通訳官を養成しなければならぬ。実際一八六〇年代あたりから、西洋の諸言語については通訳官の養成、外国語教育がおこなわれている。ところがしばらくの間、日本語については外国語という認識が生まれていない。初代の日本駐在公使である何如璋は日本語の通

訳官を連れていない。日本との交渉はどうしたのかというと、漢文の書面で行っている。しかし、実際にはたいへん不便なので、やがて日本語も外国語であるという認識にもとづいて、その学習が八〇年代末から九〇年代になって始められる。

それから第三期、九〇年代から二〇世紀の初め、日本やドイツは東アジアにおいて膨張政策を展開する。中国は今日の報告にあつたように、世界各国に政治視察団を派遣する。もともと報告では、一九〇五、六年の政治視察団までで終わっているが、実際の政治改革に直結するという意味では、一九〇七年から派遣された立憲君主制に焦点をしばつた調査団がむしろ重要である。

政治視察団について、二〇世紀初めのものを一八八〇年代のものとは比べると、二つの大きな違いがある。一つは、皇族や上級官僚を含む上位のメンバーを構成員としている点、二つ目は、持ち帰った報告書が実際に政策立案に直結したという点である。

それではいったいどのような視察報告をしたのか。今日の報告ではふれられなかった立憲君主制に関する視察で重要なのは、ドイツと日本への派遣である。ドイツに派遣された視察員がどのような報告を提出したのかというと、中国歴代の王朝の統治方法、すなわち法や制度ではなく、教化によって人民を緩やかに統治する、そういうものそのまま、変える必要はないというのである。そのような報告の根拠とされたのが、ドイツの保守主義的な傾向である。具体的には、木戸が

ドイツで調査をした時、あるいは伊藤がウイーンに行く前のドイツでの調査の時に手助けをした青木周蔵が、ヴィルヘルム一世から何よりも本国の歴史こそが大切で、他国の経験というものは補助的に扱えばよいと聞いたという情報を視察報告の中に入れ、中国は歴代王朝がおこなった伝統的な統治方法をまず基本的に守るべきだと述べている。

一方で、日本に出かけていった人物は立憲君主制に向けて改革を進めて行くべきだと報告している。ただし参考にすべき対象は、イギリスやフランスではなく、日本が重視されている。なぜなのか。イギリスやフランスの近代化は、人民の反乱や革命といった流血の歴史、あるいは自由などの権利要求といったものの結果である。それに対して、日本の場合はその伝統を生かしながら、政治指導者が率先して、混乱が生じないうちに立憲制を導入した、それこそが見習うべき対象であるという報告書を提出している。

ただし、このような報告について気をつけておかねばならないことがある。この点を指摘して発言を終える。このように中国の近代への契機として、日本への認識が深まっていくわけであるが、それには日本の政治家や学者によって刷り込まれたところもあるということである。その一例として大隈重信の出版物のことを挙げておく。大隈重信はいろいろな著書を残している。著書は編纂物が多いけれども、その中で大部のものが『開国五十年史』である。これには邦文、英文のものに加えて漢語版のものと三種がある。『開国五十年史』

の邦文版と英文版では、内容にいろいろな違いがあるといわれているけれども、重要なことは、邦文版や英文版にはない「序」が漢語版には付いていることである。その「序」の中では、東アジアの近代化に関するイギリスの貢献という邦文版、英文版にあったような叙述がなくなっている。そこには二〇世紀初頭、日本自体が膨張政策を取る中において、日本によって中国での改革を指導していこうとする、そのような文化面からの意図があったものと考えられる。このような一例からも、視察報告書は視察を行ったものが見聞したそのものだけではなく、他者によって刷り込まれた要素が含まれていたと考えられる。

三 全体討論

全体討論は、勝部真人氏（広島大学文学研究科、日本近代史）、金子肇氏（同前、中国近代史）、長田浩彰氏（広島大学総合科学研究科、ドイツ近代史）の三名の議長団によって進められ、時間的な制約もあったが、活発で充実した討論が行われた。

まず個別の質疑に先立ち、飯田洋介氏（岡山大学、ドイツ史）がフロアから、大要以下のようなコメントをした。なお飯田氏は周知のように一九世紀後半のドイツ・ビスマルクを専門的に研究するとともに、同時期の東アジアの情勢にも見識がある。

一九世紀半ばから後半にかけての時代状況を概観すれば、

ヨーロッパ列強がアジアに進出する際、イギリスやフランス、あるいはプロイセン・ドイツも協調しながら、キリスト教圏が非キリスト教圏に対して相対したという構図が見て取れる。たとえば中国に即していえば、太平天国や今日の報告で宮古氏が触れた義和団に対する八カ国連合軍の派遣などがある。日本に対しても、田口報告にある、四国連合艦隊の下関砲撃事件、安政の五カ国条約、あるいはその他の開国をめぐる条約においても、たとえばプロイセンの視点で見れば、アメリカやイギリスの力を借りて、ヨーロッパ協調、あるいは欧米協調という形で、日本・中国に対して相対したといえる。

この前提に基づき、本日のテーマである「自己認識・他者認識」を考えた時に、たとえば、中国や日本が近代化のモデルとして見た「西洋」というのは、おそらく集合認識、グループ認識としての「西洋」だと考えられる。だが「西洋」を個別に、たとえばイギリス・フランス・プロイセンを、それぞれ別の一国としてイメージすることはないのであるか。田口報告が触れた伊藤博文の言論、あるいは当時の憲法論議などを想起すると、やはり「西洋」一般ではなく、イギリスが取り立ててイメージされたようにも思われる。だが、それはイギリスだけが特別で、プロイセンやドイツなどは「西洋」のなかに含まれ続けたのだろうか。

この点について倉田氏は、日本や中国がいう「西洋」には、グループとして認識している場合と、個別に認識している場合とが並存し、二つのイメージが衝突しているのではないか、

と自身の仮説を提起し、中国や日本にとって「近代化」のモデルがどのように理解されていたのか、という点を明らかにする必要があったとした。

次いで、司会から日本史、西洋史、東洋史の順で、曾田・飯田両氏のコメントおよび質問用紙によって提出された論点へのリプライが求められた。

日本史の田口氏は、飯田氏からのコメントに即して、①四国連合艦隊の下関砲撃の際にも中心的な役目を担うのはイギリスで、駐日公使のオールコックやパークスなどがリーダーシップをとっているようにみえること、②イギリスとフランスの間に対日貿易をめぐるライバル関係が存在したことなどをふまえると、日本側から見た時欧米というまじりはあるとしても、やはりイギリスの存在はかなり大きかったと理解していると答えた。またアメリカについては、イギリスから独立を果たした点なども含めて理想化した点もあり、ヨーロッパ諸国とは多少異なる見方をしていたのではないかと指摘した。

続いて個別の質問へのリプライに移り、田口氏はジョン・ギャラハーとロナルド・ロビンソンの「自由貿易帝国主義」論に基づき、イギリスは日本を清朝とともに「非公式帝国」として、自由貿易を通じて支配しようとしたと理解していると述べた。またウォーラスティン以来の世界システム論に関しては、山下範久氏の議論などを参照して、今後とも検討してゆきたいと回答した。

田口氏は最後に吉田松陰のアメリカ独立戦争の認識に触れ、松陰は『坤輿図識』以外に『海国図志』をも参照して、アメリカ独立戦争について考察を深めたが、彼のアメリカ理解は「代表無くして課税無し」というレベルまでには到達していなかったのではないかと、とした。

また大井氏からは、ドイツにとつての東アジアという地域概念について、次のような応答があった。日本とは異なり、ドイツにとつてアジアに特別な価値は与えられず、シンガポールからオホーツク海までを示す、単なる地理的な概念として理解された。ドイツはこの地域をひとつの区切りとして海軍のステーションを設置し、管轄範囲を定めた。ここで問題となるのは、『ライプツィヒ絵入り新聞』も示すように、中国や日本ばかりがクローズアップされ、シヤムとか朝鮮が軽視されていることである。この点をふまえれば、ドイツの東アジアの国々に対する評価の違いが想定され、その点も検討課題の一つだと思われる。

次いでドイツのメディアアの報道姿勢について、次のように指摘した。ドイツが清朝に「定遠」と「鎮遠」の二艘の軍艦を売却して北洋艦隊の主力艦となったが、日清戦争では完敗した。この点に関して『絵入り新聞』は、ドイツにとつて都合の良い点だけを報道し、都合の悪いことについては多くを語らなかつた。またイギリスだけでなく、ドイツも日本の海軍を支援しており、その点を強調して日清戦争の帰趨はドイツの薰陶を受けた優秀な日本人乗組員の質の高さに起因する

と、議論をすり替えている。同様に、八カ国連合軍の最高司令官はドイツ人のヴァルデーゼーだが、彼が中国に到着した時には、義和団の乱は治まっていた。しかし、最高司令官がドイツ人だったことを強調している。こうした報道姿勢は、ドイツだけのものではなからうが、指摘しておきたい。

ドイツの後進性についての自己認識は、一九世紀の末から二〇世紀の初めにかけて、東アジアとの関わりが深くなつていくなかで払拭したのか、という質問に対しては、認識レベルでは完全に払拭したと考えている。しかし現実のレベルでは英国の支援を得て、ようやく東アジアへの派遣が可能となるなど、認識と現実のレベルではギャップがある。認識レベルでは後進性を払拭したと自画自賛していても、やはり現実レベルでは追い付いていない事実があった、と回答した。

飯田氏のコメントに関連しては、①平和時の経済的な競争、たとえば中国での利権獲得競争などでは、国と国との争いと理解しているが、②義和団事件や辛亥革命などの有事には、西洋はどう立ち向かうべきかという点で集合認識が強く働くというように、平時と有事の間で、ドイツの国益を最大限にするために、行ったり来たりしている状況だったが、③第一次世界大戦時には、ドイツのなかでは西洋の集合認識というものが完全に消え去った、と述べた。

宮古氏は次のように応答した。督撫が主導した新政が、中央政府の立憲の強化を志向した理由について質問があったが、現時点では解答は見つかっていない。ただ次の質問を考

えることが、その問いに対する答えを考えるヒントになっていくと考えている。つまり立憲というものをスローガンに掲げていても、その主張の中身はほぼ議院制のみの場合、逆に内閣制導入など集権的行政改革のみを扱う場合といった違いがある。督撫が主張した「地方自治」とは、議院制や選挙の実施など民の政治参加を最も主張していたのが督撫だった。

ところが、視察団が戻ってくると、皇族のなかで、たとえば載沢のように集権的な行政改革に関心が向かって行く。その狭間に立っていたのが端方だという見方ができるだろう。その各類型の論者によって、曾田氏のコメントにもあったように、当然海外モデルの選別に違いが出てくるはずだが、それが一本化してしまう。内閣制導入で日本をモデルとするので、地方自治においても日本をモデルにしてしまう。そういうような葛藤・矛盾というのが出てくる。督撫からすれば「民主」の実質について、当時の政治情況のなかで言い難い面がある。しかし他方では、「民主」に対してまた違う理解が生じ、その点での錯綜が当初の改革の構想が違う方向へと最終的に向かうことに影響していったのではないかと展望している。

報告者からの応答を受けて、司会の長田氏から全体討論の前に、個別報告に即して補足的な質疑が求められ、まず薩摩真介氏（広島大学総合科学研究科）が、以下のように発言した。

田口報告において、ロビンソンとギヤラハの議論が参照されていたが、実態として日本が非公式帝国になったと評価

することと、イギリスの主観的意図として、そうした支配を目指していたということとの間には、大きな違いがある。というのもロビンソンとギヤラハの議論の後、学界では非公式帝国の妥当性をめぐって相当な議論があり、当初は非公式帝国に清朝も含まれていたが、清朝に関しては日本の東洋史学界でも批判が出てきた。またアルゼンチンも典型的な非公式帝国と言われたが、南米史の研究者からは否定的な議論もある。つまりイギリスが日本に対して自由貿易を押し付けようしたのは間違いがないが、イギリスの主観的な意図が実態を表しているとは限らず、非公式的帝国の概念については慎重に扱わなければならない。それに対して田口氏は、イギリスが日本を対等な国とみなしていなかったとは思いますが、概念規定にはさらに厳密になるべきだったと述べた。

続いて、河合信晴氏（広島大学総合科学研究科）が、ドイツがおかれた現実とドイツが「他者認識・自己認識」として後進性を払拭したという認識との間に齟齬があり、その認識が破綻したとすれば、それはいつ頃なのか。またその破綻の結果というのは、一体どのような形で現れたのか、と問うた。

これに対して大井氏は、次のように応えた。三国干渉のあたりから、日本人のドイツに対するイメージは徐々に悪くなり、一九一四年八月に日本がドイツに宣戦布告したことにより、決定的な転換点を迎えた。だが、宣戦布告の直前まで、ドイツは日本がイギリスと手を組んで第一次世界大戦に参戦することはないとしていた。なぜならば、日本が今あるのは

ドイツのおかげであり、日本の中にはドイツに対して共感を持つ政治家、特に陸軍を中心に山県有朋などがおり、ドイツに抵抗することはないだろうと考えていたからである。

しかし、第一次世界大戦までの二〇年間に、日本はかなり変化した。その点を読み間違え、日本に対するドイツの貢献について過剰に評価し、一方的な幻想や思い込みが先行して日本の現実を見誤ったのである。そのために突然日本がドイツに対して宣戦布告をしたと慌てたが、何もできず東アジアにおけるドイツの勢力は一気に消滅してしまう。この点からいえば、決定的な時点は一九一四年で、自分たちの認識と現実が一致していなかったことを知るのではないかと考えている。

続いて司会の勝部氏が、三報告の扱った考察対象時期は異なっており、その意味で曾田氏がコメントしたように、それぞれの時期の状況に規定された「他者認識・自己認識」であり、その点を整理してゆく必要があると指摘した。またインドや東南アジア、さらには台湾・朝鮮半島といった植民地化された地域の問題が組み込まれていない点も、今回のシンポジウムの残された課題であると述べた。

そのうえで、全体討論で考えたい具体的な論点の第一として、「他者認識・自己認識」が「先進」「後進」という時間軸の中で議論されており、発展段階論的な議論に立ち戻ってしまう恐れがあるとして、次のように述べた。

この危険性を克服するためには、「他者認識・自己認識」

という枠組みのなかに、地域・国を類型化する議論を組み込む必要がある、「他者認識・自己認識」というものが、それぞれの国の近代化の内実に如何なる特質を与えたのか、あるいは、その地域・国が近代化していく際に如何なる特色があり、それが「他者認識・自己認識」にどのように影響してきたのか、について検討する必要がある。

第二に、長いスパンでものを考えた時に、今日取りあげられた「他者認識・自己認識」がそのまま継続する訳ではなく、どこかで転換が起きる。その最も大きな転換というのをどこに求めるのかという問題も、見通しとしては必要になってくる。

そのうえでフロアにさらなる全体討論の課題の有無を問いかけた。それに対して春日あゆか氏(広島大学総合科学部)が、報告者の間に「近代化」のとらえ方に齟齬があるのではないかと、次のような問題提起をおこなった。国によって、また報告者の専門領域により、当然「近代化」の内容は異なるにしても、シンポジウムの共通論題として、それぞれの報告者は「近代化」をどのように理解しているのか。たとえば自身の専門を例としていえば、イギリスでは「近代化」として、国民国家の形成は大きな問題ではなく、それよりも工業化や国制上の変革に重点が置かれている。もちろん他の国はイギリスという国が突出したことによって、そこに追いつこうとすることで、似たような対応をとることになる。それゆえ国民国家形成という課題が重要になるのだが、この点をもって

も国によって、近代化というものがもつ意味合いは異なることが分かる。報告者の考えを聞きたい、とした。

この春日氏の問題提起に対して、まず田口氏が、次のように応えた。今回の報告のキーワードは、貿易だと思う。世界の貿易体制のなかにいかに日本が参入していくのか、その時どのような立場として参入できるのか、というのが日本で大きな課題になっていた。また「近代化」というのは、報告で触れた伊藤博文の演説にもあるように、文明国になる、今ある世界の通商網・貿易網に日本が先進諸国と同じ立場で参入していく、これが日本にとつての「近代化」の意味であろう。それが後に文明国とは何かとなり、それは立憲国家であるとして近代国家形成が始まっていく。

宮古氏は次のように応えた。清末新政を主導した督撫にとつては、伝統的な政治構造を近代的に制度化するということが近代化の目的だったように思われる。現在の政治構造を近代的に制度化するために憲法を作り、それを實現してゆくとしていたが、それに対して完全に政治構造を変えてしまうことを立憲と考える人たちも出てきたところで、齟齬が生じて、近代化がうまく進まなくなっていく、というのが清末中国の場合だと思われる。

大井氏からは、ドイツの場合には一九世紀の近代化といえ、第一に工業化があり、それに加えて国家統合が目指された。というのも一八七一年にドイツ帝国が成立したが、国民国家という形でまとまらない、近代国家の前提が作れないと

いうことで、まず工業化が目指され、報告でも触れたが、それにもない海軍力を増強しようとした。それは単に海軍を強くして戦争をするためだけではない。コスト的にいえば、イギリスに軍艦を発注した方が安かったはずだが、装甲艦の国内生産にこだわったのは、多少コストがかかっても国内産業を強くしないといけないと考えたからであり、それ故に海軍に対する支持が広がっていくという相乗効果があったと思われる。

さらに工業化・国家統合・海軍力増強のその先に、海外での拠点や植民地の獲得までを含めて、一九世紀ドイツは最初から近代化の到達点を設定していた。なぜかという、イギリスとかフランスという近代化のモデルが最初から存在していたからだと思われる。そして日本や中国の場合には、ドイツという一九世紀において近代化を急激に遂げたモデルがあった。こうしてモデルが重なり合うなかで、近代化のイメージが形作られていったのではないかと述べた。

三者の回答に対して、春日氏からは近代化の過程でどのような「他者認識」が重要になってくるかというのは国によって相当異なり、ドイツの場合は「他者」とは東アジアの国というよりはイギリスやフランスだったと理解したが、今回のシンポジウムに即すと、日本と中国では「他者」とは誰なのか、また両国で違いはあるのか、とさらに質問した。

この点について司会の金子氏が日本史にしても中国史にしても、自分の国のそれまでの伝統をどう考えるか、という点

が大きな論点となる、と問題提起した。つまり国情という言葉葉を中国はさかんに使い、西洋的なものは中国には合わない」と主張するが、今日のシンポジウムのなかでも、自己の伝統に対する「自己認識」を前提として、西洋からの制度的な移植を志向せざるを得ない時に、「他者認識」が出てくる。伝統や国情と比較して、制度選択の対象としての欧米をどう見るか、また両者をどう関連づけるのが、近代化の方向として重要になってくると思われる。他方、ドイツの側は、中国・日本において政治や経済の転換に、その伝統がどう関わってゆくと観察していたのか、あるいはそうした観察はなかったのか。この金子氏の問題提起に対して、田口氏は伊藤博文の憲法案審議会演説を取りあげ、江戸時代までの日本の国家システムとしての封建制度を廃する、という立場で近代化が進められたという一連の流れを展望した。

宮古氏は「他者認識・自己認識」に関して、端方たちは当時、他者の政治構造に対しては分権あるいは集権と分類することが可能だったが、自分たちに対してはそれが未だできない。つまり、伝統的な、現在の政治構造を近代的に制度化するという時に、中央にいる官僚は広い中国の隅々までの実情を知らず、現状を海外の政治に当てはめることができない。だから、海外政治を中国に援用する際に、できないことをやるうとしてしまう。それに対して現状を最もよく知る督撫は疑義を呈すが、その督撫であつても現在の中国の政治構造を、海外の政治構造に即して分権とか集権という言葉で規定でき

ない。そういうような状況にあつたのが清末中国であつたと指摘した。

大井氏はドイツの東アジアの伝統に対する認識について、ドイツの東アジアに対する認識は、日本だけ、あるいは中国だけから作られるのではなく、日本と中国を比較する中でイメージが作られ、その意味でドイツから見ると重要なのは、日本と中国の関係だと述べた。ただし日本の伝統とか文化、総じて以前から残っているもののルーツは、元をたどれば中国から来ているはずだが、この点についての認識がドイツ側ではなく、今日の前にある日本の文化や伝統、そして中国の文化や伝統、あるいは実際にいる日本人や中国人を評価の対象にしている。その意味で短絡的な結論をドイツは求めたが、た。ドイツは日本が背伸びをしようとする、たとえば万博会場で本当は日本の一般家庭ではありえないような装飾を取り入れて、それを西洋人に見せようとする、「それは背伸びだ」「日本は純粋な日本の物を見せてくれ」と指摘する。しかし、その一方で日本の近代化を称賛し、模範生として絶賛する。こういう矛盾した認識や伝統に対する見方があるの、本当の意味で日本の伝統や文化を理解しているのか、あるいは中国の伝統や文化を理解したうえで、それに日本が勝るといふ判断を下しているのか、疑問はある。

続いて勝部氏が次のような総括発言を行った。一九世紀末、二〇世紀初というのは伝統、つまり今までの歴史をふまえた形で、それに基づいて「文明」世界へ入り込み「文明化」し

ていくプロセスが、国や地域によって特徴的な姿を表している時代だった。そこに「他者認識・自己認識」という問題が、深く関わっている。たとえばウィーンで伊藤博文一行と会ったシュタインは、地球儀を回して「われわれの文明はここから始まった」とエーゲ海を指し、ここから今のわれわれがあると述べ、そのうえでさらに地球儀を回して「東シナ海、ここにあなたがたの文明の発祥がある」と指摘した。それを受けて伊藤が憲法を作っていくが、伊藤は「これは徹頭徹尾日本的なものである」と胸を張った。自分たちの伝統を踏まえ、新しい憲法を作ったという自負があったといえよう。

ただその憲法がどう運用されていくのかという重大な問題がある。立憲制がどう運用されていくのか、この点も近代化の質を問う重要な意味がある。その点で「民度」の問題が重要な検討課題として残っている。「民度」をどう考えていくのか、宮古氏の報告に地方分権と中央集権との問題が出てきたが、これにも「民度」が関わっている。この「民度」という問題は当然、産業化、工業化と関わりながら、各地域やその地域の「近代」の姿を規定していったように思われる。

最後に勝部氏が、議論が十分に深められたとは到底いえないが、「明治維新一五〇年」の年に「近代」を改めて考えるうえで、本シンポジウムは多少の意義があったのではないかと総括し、報告者や発言者、そして参加者に感謝の言葉を述べて、本シンポジウムは閉じられた。